

カイロで共に暮らした友への手紙

緊急特集 都知事の「ウラの顔」

北原 百代

2024/04/09

ニュース

社会

政治

国際

-
-
-
-
-

百合子さん、あなたが落第して大学を去ったことを私は知っている——

- ▶父の伝手でカイロ大へ2年生で編入
- ▶進級試験に暗い顔で「落ちちゃった」
- ▶取材に答えた「日本航空駐在員」の肩書
- ▶落第後、2人でカイロ近郊に小旅行へ
- ▶自著で留年記載も証書は4年で卒業
- ▶小池氏の「消えてほしい人間」である恐怖
- ▶「乗るはずの飛行機が墜落」も嘘



【関連記事】[「私は学歴詐称工作に加担してしまった」小池百合子都知事 元側近の爆弾告発](#) 小島敏郎

- ・疑惑の火消しに焦る小池知事からのメール
- ・カイロ大声明を書いた日本人元ジャーナリスト
- ・「その手は思いつかなかったわ」知事は喜んだ

百合子さん。もうずっとお会いしていませんが、あなたの姿はテレビ画面を通していつも見えています。

初めて会ったのは、エジプト・カイロ市内のペンションでした。あなたは 19 歳で、私は 30 歳。もう半世紀以上も前、1972 年の春のことでした。

あなたは私が滞在していたペンションに、商社マンの A さんに連れられてやってきました。同居相手として、A さんが私に紹介してくれたのです。半年ほど前にカイロへ来て、カイロ・アメリカン大学に通っている小池さんだと紹介されました。



北原百代氏 ©文藝春秋

私は同居を快諾し、あなたと2人でアパートを探しました。そしてザマレックのアパートで同居生活を始めた。あなたは冗談好きで明るく、料理上手な楽しい人でした。2人で映画『ジョーズ』を観に行った時、隣で怖がって声を上げていた姿を思い出します。ある日、お風呂を沸かす火が弱くて困っていると、百合子さんが「こうすればいいのよ」とガスボンベをひっくり返してくれた。「底にガスが溜まっているんだから」と言って。大胆で少しお茶目。それもあなたの魅力でした。

カイロの日々を今でも懐かしく思い出します。だからこそ、私は深く悩み続けたのです。「黙っていたほうがいいのか、それとも世間に明らかにするべきなのか」と。

でも、今のあなたの立場では、これはやはり許されないことだと思ったのです。そして事実を知りながら、黙っている私もまた、許されないはずだ、と。

あなたは日本の法律に違反することをして、今の地位を築きました。また権力者で居続けることによって、秘密を守り続けています。

私は事実を知る者としての義務を果たしたいと思ったのです。あなたに恨みがあるわけじゃない。今の地位から引きずり下ろしたくて、語るわけじゃない。このまま黙って死んだのでは、私には悔いが残る。そう思い、この手紙をしたためました。

2 年生でカイロ大に編入

最初に同居した時、19 歳のあなたは、ほとんどアラビア語を話せなかった。でも口癖のように「お父さんが、来年からカイロ大学の 2 年生に編入できるように取り計らってくれているの」と言って、特に勉強をしている様子はありませんでした。お父さんは日本で石油関係のお仕事もされていたので、その伝手があると断っていましたね。



カイロで行なわれたイベントで(北原氏提供)

秋に私が外国人向けの語学学校に行くと言うと、あなたも2回ぐらい付いてきましたね。でも、すぐ辞めてしまった。そして、その語学学校で出会った日本人留学生 Bさんと「結婚する」と言い出した。出会って2カ月も経っていなかったのが驚きました。Bさんはアラビア語のかなりできる人でしたから、来年のカイロ大学入学にあたり、頼れる人が欲しいのだろうと察しました。

手許に残っている、当時、私が日本の母に書き送った 1972 年 11 月 29 日の手紙には、「百合子さんは来年 1973 年 10 月からカイロ大学の 2 年生に編入できることになったので、アパートでお赤飯を食べてお祝いした」とあります。お父さんの尽力が実ったのでした。

1973 年 2 月、あなたは B さんのアパートに移っていきました。新居に行くと、机の上に大学の教科書が積まれていました。彼に手伝って貰いながら、10 月からの学生生活に備えているのだと思いました。

私は 2 年の予定でカイロに来ましたが、旅行ガイドのアルバイトをするようになり、そのままカイロで暮らしていた。すると 1975 年の年末、あなたから「また北原さんと一緒に暮らしたい」と言われ、驚きました。B さんと離婚して行く場所がないと困っている様子でしたね。

私はガーデンシティに住んでいましたが、ちょうど同居していた日本人女性が帰国したばかり。受け入れることに問題はなかったのですが、少し躊躇してしまいました。というのは、前回、同居した時、百合子さんとお喋りがしたくて、やってくる日本人が多かったからです。日本語でお喋りをするので語学の勉強にはならないですし、来客の接待で疲れてしまいました。

でも、離婚して行く先がなく、1976 年 5 月の大学の進級試験に向けて勉強しなくてはならない百合子さんの頼みを、無下には出来ませんでした。

辞書も持っていなかった

ただ、2度目の同居生活では、来客は打って変わってひとりもありませんでしたね。代わりにあなたは夕方、外交官の夕食を作るアルバイトに出かけていました。

日中は机に向かっていたのですが「辞書を貸して」と言われ、驚きました。「辞書も持たずどうやって勉強していたんだろう」と。あなたは調べた単語に鉛筆で丸を付けていましたが、返してもらった辞書を開き、丸の付いた単語を見て「こんな言葉も知らなくて大丈夫かな」と、正直なところ思っていました。

覚えているかと思いますが、エジプトでは口語と文語が分かれています。日常で使うのは口語ですが、インテリ層が通うカイロ大学の教科書や授業では文語が使われています。この文語はエジプト人ですら使えない人も多い。だからエジプト人でも4人に1人が留年すると言われています。それを日本人が習得するのは並大抵の努力では出来ません。

他の留学生からも、カイロ大学の授業がいかに難しいものであるか聞いていました。外国人は入学を融通して貰っても、進級試験では容赦なく落とされる。皆、大学に通いながら家庭教師を雇っていました。日本人で初めてカイロ大学を卒業した、大東文化大学名誉教授の小笠原良治さんは留学生の中では抜群の語学力だと言われましたが、彼でも卒業までに7年かかったほどでした。

壁に「初心貫徹」と書いた紙を貼り、水を張った洗面器に足を浸して涼をとりながら、ひたすらノートに文字を書いていたこともありましたが、何を書いているのか聞くと、教科書を引き写しているだけで意味はわからない、図形のように丸暗記して書くと、あなたは言いました。そんな勉強で進級できるのか疑問に思いましたが、黙って見守っていました。

進級試験は5月から始まって1カ月以上続き、合否が掲示板に張り出されます。7月上旬、結果を見に行った百合子さんは肩を落として帰ってきた。「落ちちゃった」と答えるあなたは、暗い顔をしていました。そして「お向かいの先生のところに行って相談してくる」と言って、部屋を出て行きました。私たちのアパートの同じ階に、大学の教授が住んでいたからです。やがて、あなたは浮かない顔で帰ってきて、こう言いました。

「先生から、『あなたは最終学年ではないから、追試を受けることができない』って言われた」

私はそれを聞き、あなたはお父さんのコネで入学したけれど、あの語学力ではカイロ大学の授業にはついて行けなかったのだと、察しました。

進級試験に落ちてしまった百合子さんは、JALの現地スタッフとして働き始めましたね。チケットの販売係のような仕事でした。進路に悩んでいるようでしたが、私はデリケートなことだからと、あえて深く聞かないようにしていました。

1976年8月、私が旅行ガイドの仕事で、日本人ツアー客を率いカイロからルクソールに向かう飛行機に乗った時のことです。飛行機がハイジャックされる事件に巻き込まれました。大勢の日本人が乗っていたので、日本の新聞でも報道されました。日本の私の親にも「安否を気にする親族の声」を求めるメディアが殺到しました。この時、あなたも読売新聞の取材を受けていますね。「同居する北原さんの安否を心配する日本航空駐在員の〇〇(Bさんの名字)百合子さん」として。

百合子さんが「小池」ではなく、離婚しているのに B さんの名字を名乗ったことに驚きました。そして「日本航空駐在員」となっていることにも驚きました。もしかしたら記者が聞き間違えたのかもしれませんが、あくまで現地採用のスタッフで、駐在員ではなかったからです。

幸いハイジャック事件はすぐに解決し、私はその日のうちにアパートに戻りました。約 1 カ月後の 9 月下旬、日本から旅行会社の社長が来て、事件に巻き込まれた私を慰労してくれることになり、カイロ近郊に小旅行をしました。この時、あなたも誘ったのは、試験に落ちてから落ち込みがちだったので、気晴らしになると思ったからです。その時のスナップ写真が今も残っています。9 月終わりから 10 月初めにかけてのことでした。



ピラミッドの前で小池氏と(北原氏提供)

そしてある時、あなたは JAL の仕事を終えて帰宅すると、興奮した様子で、私にこう言いました。

「急いで日本に行かなくちゃいけなくなったの。でもお金が足りない」

切っ掛けはサダト大統領夫人の来日でした。これを知ったお父さんから電話があり、「日本に帰って大統領夫人のアテンドをしろ。話はつけてあるから」と言われたというのです。あなたは身の回りの物を売り、航空券を買うお金を工面した。私も頼まれて、あなたのアイロンなどを買い取りました。そして一時帰国をした。10月初めのことでしたね。

サダト大統領夫人は 40 歳を過ぎていましたが、カイロ大学に学生として通っていました。百合子さんのお父さんは日本アラブ協会に「娘は夫人と同級生で顔見知りだ」と言って売り込んだのだと後に聞きました。

「だって、バレちゃうからね」

日本であなたがどう過ごしていたのか、私は知る由もありませんでした。でも 11 月半ば、カイロに戻ってきたあなたをひと目見て、とても驚きました。別人のように晴れやかな顔をしていたからです。そして荷ほどこきをしながら、あなたは「これ見て」と新聞を差し出しました。

百合子さんの顔写真が大きく載っている記事を読み始め、私は驚きました。「カイロ大学文学部社会学科を日本人女性として初めて卒業した」などと紹介されていたからです(「サンケイ新聞」1976 年 10 月 22 日)。

私は思わず尋ねました。

「そういうことにしちゃったの？」

あなたは、

「うん」

と、屈託なく言いましたね。

あなたは、冗談を言って人を喜ばせたり、驚かせたりすることが大好きだし、得意でした。だから悪気はなかったのかもしれませんが。私も注意することは出来ませんでした。落ち込んでいた姿を見ていましたし、まさか日本の総理候補になるような地位を築くことになるとは、夢にも思っていなかったからです。

驚いている私にこう続けました。

「私、日本に帰ることにした」

すべての憂いは去ったという安堵の気持ちと、自信に溢れて見えました。そしてあなたは翌日から帰国の準備を始めました。ある朝、ピラミッドに行くと言って出ていったことも。

そして、明日は帰国するという別れの晩がやってきました。あなたは私の部屋に来て、手のひらに小さなケースを握らせて言いました。

「これ、プレゼント。絶対に人にあげたりしないでね」

模造真珠のブローチで、ケースの表には「JAPAN AIRLINES」。それに続く言葉を、私は今も、忘れることができません。あなたは言いました。

「私、日本に帰ったら本を書くつもり。でも、そこに北原さんのことは書かない。ごめんね。だって、バレちゃうからね」

それでいい？ と、あなたに念押しをされるように言われ、私は頷くよりほかはありませんでした。

留年したのに4年で卒業の謎

しばらくして、あなたが評論家の竹村健一さんのテレビに出るようになったと聞きました。私が日本に一時帰国した際に、一度だけ会いましたね。試験に落ちて暗い顔をしていたあなたが思い出され、タレントとして成功したことを嬉しく思いました。この時はまだ、そう思っていたのです。

ある日のこと。カイロ市内の外国人向けのペンションのロビーの本棚に、日本人旅行者が置いていったのでしょ、あなたの書いた本が置いてありました。『振り袖、ピラミッドを登る』というタイトルで、エジプトの民族衣装を着た百合子さんの写真が表紙になっていました。

読み進めていくうち、私は「これは本当に百合子さんのことなのだろうか？」とってしまいました。

カバーの著者紹介には、「カイロ大学首席卒業」とありました。本文では、留年したと書いているのに、著者紹介では1972年入学で1976年卒業と、なぜか4年間で終えたことになっていました。

また、5年間のカイロ留学時代を書いた本なのに、予告通り2年間同居していた私のことは一切書かれていない。代わりに、私が百合子さんに語った出来事が、あなたの体験として書かれているところがありました。もちろんBさんとの結婚には、まったく触れられていません。

進級試験に合格する度に高いところに登り、「やったぞ、合格したぞ」と叫ぶことを習慣にしてきた、と書かれていることにも驚きました。1年生の時は試験に合格して、どこそこに登り、2年の時はどこそこ。卒業のかかった4年生の試験に受かった時はピラミッドに登って、頂上で振り袖を着て記念写真を撮ったと書かれており、その写真も載っていました。そういえば帰国前に、ピラミッドに行くと言っていた日もありましたね。

百合子さん、あなたはここまでしてしまうの、と思いました。

私はエジプト人男性と結婚し、その後もカイロで暮らしていました。カイロにはあなたのご両親がやってきて日本料理店を開きました。お父さんは個性が強く、大言壮語することで有名でした。政治家の名前を出しては「知り合いだ」と言っていました。また、日本人旅行者を見つけると話しかけて「カイロ大学を卒業した小池百合子の父親だ。小池百合子を知らない？ それでも日本人か」と言ったりもしていました。でも私の前では、そんなお父さんも黙り込んで小さくなってしまふ。それを見て、私は気の毒に思いました。

あなたが経済番組の司会をするようになったと聞いて、学歴のことはバレないのかなと思いましたが、その時も、私はその程度にしか考えていませんでした。

ただ、国会議員に転身したと聞いた時、それなら「カイロ大学首席卒業」と言ってきた嘘を改め、本当の学歴で選挙に出なければいけないはずだと思いました。タレントと政治家では社会的な責任が違う。何より公職選挙法に違反する行為です。メディアにだって、もう嘘は通じなくなるはずだと思いました。

現に立候補と同時に、日本では学歴詐称が話題になったと聞きました。でも、不問に付されて当選した。私は日本のメディアは追及できなかったのかと驚きました。

真実を知っていることの恐怖

私の中ではっきりと気持ちが変わったのは、あなたが大臣になったと知った時です。たまたま日本にいてテレビをつけたら、環境大臣になった百合子さんが認証式のために皇居に向かう様子が流れていた。私は嘘をついたまま大臣にまでなってしまうのかと衝撃を受けました。

あなたのキャリアにおいて「カイロ大学卒業」の経歴は絶対的なものなのでしょう。それがなければ、皇居の認証式に行くことはない。でも実際は卒業してはいない。それを私は知っている――。

私は、あなたから避けられていることを自覚していました。最も知られたくない過去を知っている人間なので、煙たがられても仕方がない。でも、大臣になったと知った時から、私はあなたにとって、煙たいどころではなく、消えて欲しい人間なのではないか、と思うようになりました。

エジプトは軍事国家でアラブの春以降、政情不安で治安も悪くなっています。一方、日本はエジプトに多額の ODA を出している。カイロ大学は軍の影響下にあり、大学にも ODA が投入されています。大臣になったあなたはエジプトにとって大事な存在になったはずですよ。

ご存じの通り、日本と違いエジプトは不正がまかり通る社会です。権力があれば大抵のことができてしまう。人が殺されても、調査が尽くされることもありません。

私は次第に恐怖を覚えるようになり、信用できる数人の友人に、悩みを打ち明けました。すると、「そういうことは黙っていたほうがいい」と言われました。

私はカイロで働いていましたが、徐々に表に出ること、特に人混みが怖くなりました。出勤しようとしても、どうしても怖くて行けなかったこともあります。インターネットが普及し、カイロでの生活をブログに書いたりもしたかったのですが、それも諦めました。目立つことが怖かったからです。新たに人と知り合っても、住所を交換することが憚られました。

私があなたと一緒に暮らしたのは長い人生の中のたった 2 年です。でも、その 2 年間のせいで、私の後半生は大きく変わってしまいました。普通に暮らせなくなってしまったのです。いつも心に悩みを抱えていました。

同時に、黙っていていいのだろうかとも悩み続けました。事実でないことが、歴史に事実として刻まれてしまう。それを見過ごしていいのか。本当のことを知っているなら、言わなければならないのではないか、

と思うようになったのです。でも、私が本当のことを言ってしまったら、あなたはどうなってしまうんだろう、政治家では居られなくなってしまう、その引き金を私は引くのかと、苦悩は続きました。

嘘をつかせるメディアの罪

百合子さんが都知事となり、さらに総理大臣候補とまで言われるようになり、私の恐怖や苦悩はさらに増していきました。

いくら私があなたのために事実を語らずにいても、隠れ暮らしていても、この恐怖からは解放されないのだと悟りました。それに百合子さんがしていることは、やはり犯罪なのです。黙っていることは、その罪に加担するのと同じです。

そこで私は、メディアに伝えようと思い立ち、まず朝日新聞に配達証明郵便で、手紙を送りました。「小池百合子さんは学歴を詐称している。自分は同居しており、全てを知っているので話を聞いてくれないか」という内容でした。自分の氏名と、当時は日本に滞在していたので、その住所も書きました。ところが、まったく連絡がなかった。メディアにもあなたの力が及んでいるのではないかと、私はさらに恐怖の念に囚われました。

それに、久しぶりに帰ってきた日本のメディアの報道を見ていると、不思議に思うことばかりでした。テレビは政治家の政策や人となりを調べて報じるのではなく、ファッションや、面白おかしいエピソードや駄洒落を取り上げてばかりいました。これなら、あなたの「難関のカイロ大学を首席で卒業した」「卒業のお祝いをするために、着物でピラミッドに登った」という話を頭から信じて紹介していたのも頷けます。百合子さ

んの所有する卒業証書をテレビのスタジオで見せ、「卒業している」と説明したキャスターもいました。その場にいる誰もアラビア語を読めなかったでしょうし、その卒業証書の細部まで検証して、報じたわけでもなかった。

あなたはよく「自分は乗る予定だった飛行機が墜落したことが2度もある。拾った命だと思って政治をしている」と、話をしています。でも、これも嘘ですよ。

その時期、私はあなたと一緒に暮らしていたから知っています。1973年、リビアからカイロに帰る時、便を遅らせたら、自分が乗る予定だった飛行機が撃墜されたと言っていますね。確かにお父さんとリビアに行っていたけれど、事故便とは関係ありませんでした。何事もなく家に帰ってきたあなたと、Bさんと3人で、楽しく食事をしたのを覚えています。

また、留学を終えて日本に帰る予定だった1976年12月24日発のエジプト航空機に乗る予定だったけれど、卒業証明書の発行が遅れたのでキャンセルしたら、それが墜落したと言っています。この話も、私の記憶にはありません。

作り話にメディアが飛びつくので、百合子さんも「受ける」話を作ってしまうようになるのでしょう。私は悪気なく嘘をつく百合子さんも悪いとは思いますが、でも嘘をつかせ続けてきた、メディアの責任も重いと思います。

「仮名で証言」へのバッシング

その後、偶然、ノンフィクション作家の石井妙子さんが『文藝春秋』他に発表した記事を読みました。都知事になったあなたを礼讃する記事が溢れる中、石井さんの原稿は冷静にあなたを分析していました。私は「石井さんは小池さんの嘘に気づいているのではないか。この人ならわかってくれるのでは」と思い、最後の望みをかけて、出版社気付で2018年2月、手紙を送りました。

すぐに連絡があり、私達はともに長い時間を過ごしました。あなたが大臣になった日から悩み続けた私は、やっと自分の話に耳を傾けてくれる人に出会え、心身が解放されていくのを感じました。ああ、これで私の身に何かがあっても、全てをお伝えしたから、大丈夫だと。

その後、石井さんの『女帝 小池百合子』が2020年5月に出てベストセラーになりました。でも、同時にネット上には批判の声も溢れました。同著で私は仮名を希望し、「早川玲子」として証言しています。そのためネット上では「仮名なのはやましいところがあるから」「早川玲子は存在しない」などと批判を受けました。

でも、考えてみてください。実名で、顔をさらして証言することが一般市民にとって、どれだけハードルの高いことであるか。そうやって批判する人たちだって、現に本名をネットで名乗ってはいないのに。

あなたへの最後の願い

『女帝』が異例のベストセラーとなっても大手メディアは学歴詐称問題を真剣に取り上げませんでした。

それだけではありません。出版後に突然、「カイロ大学の声明」が出ると、それだけを報じたメディアもありました。なぜ権力者の味方だけをするのか。声明文が出た後、ますます、ネットでは「だから仮名の証言者なんて信じられないんだ」と、バッシングは強まっていった。私は絶望と恐怖を、余計に強くしました。同時に、あなたが都知事選で再選を果たすのを、ある種、諦めをもって見ていました。

それから3年経った2023年11月。『女帝』が文庫本になると連絡を受け、私は自分から「この機会に実名表記に切り替えて下さい」と言いました。「仮名だから信じられない」と言われてきたので、実名にしようと思ったのです。

メディアはどうしたら報じてくれるのか。ここまでしたらメディアは報じてくれますか。そんな必死な思いで、実名を出すことを選択したのです。

百合子さん、私はあなたの嘘に苦しめられてきました。この苦しみを、どうかわかってください。そして、百合子さん、あなたも長年、実は苦しんできたのではないですか。

なぜそんなに学歴にこだわったのでしょうか。中卒でも高卒でもいいじゃないですか。大切なのは、政治家として何を成すかです。でも、難関大学を卒業したと言いたいのなら、きちんと勉強して卒業しなければいけません。出てもいない大学を、「卒業した」と言ってはいけません。

どうかこれ以上、罪を重ねないで欲しい。政治家として働き続けるのであれば、そして、また選挙に出るのであれば、本当の経歴で勝負をしてください。これが百合子さんへの、私からの最後のお願いです。

genre : [ニュース](#) [社会](#) [政治](#) [国際](#)